

FCT第24回メディア・リテラシー研修セミナー報告

メディアが構成する多様な性

FCT第24回メディア・リテラシー研修セミナーは、2023年8月5日～6日に「メディアが構成する多様な性」をテーマにして、滋賀県男女共同参画センター（近江八幡市）との共催事業として実施した。参加者は、大学生、教員、企業、NPO、男女センター利用者など20人（主催者含む）。地域も滋賀県内、京都府、大阪府、愛知県、山梨県、神奈川県、東京都、青森県と広域から集まり、幅広い年齢層（20代から80代）の参加者が熱心に参加した。

今回の研修セミナーは、主流メディア、ネット上で流布するジェンダーに対するステレオタイプな表現、セクシュアルマイノリティへの差別的な言説が流布している現状を踏まえてプログラムを組み立てた。2日間のねらいは次の通りである。

- ・メディア・リテラシーワークショップを通して、メディアがどのように「多様な性」を構成しているかを映像言語や価値観に焦点をあてて分析し、あわせて自分が持っている捉え方について振り返る（1日目）

- ・フェイクニュースについて制作を含めて実践的に学び、フェイクニュースが流布する背景を多角的に考える（2日目）

2日間を通して、クリティカルに日常のメディアを分析し、フェイクニュースを制作するという実践から、メディア上のセクシュアルマイノリティへの差別的な言説はなぜ流布するのかを多角的に考える。

●セッション1 メディア・リテラシーとは 報告：西村寿子

このセッションでは、メディア・リテラシーを学ぶ出発点である、メディア・リテラシーの定義、基本概念について解説するものである。今回は、ジェンダーの構成にメディアの構成が深く関わっていることを結びつけて問題提起をした。

ジェンダーは社会的・文化的に構成された性差と定義されているが、次の定義を踏まえると日常の実践とジェンダーの構成とをより結びつけて捉えることができる。

「私たちは、さまざまな実践を通して、人間を女か男か（またはそのどちらでもないか）に＜分類＞している。ジェンダーとは、そうした＜分類＞する実践を支える社会的なルールのことである」（加藤秀一『はじめてのジェンダー論』、有斐閣、2017）

また、多様な性とは、「ジェンダー：社会的・文化的な性 セックス：身体的な性 セクシュアリティ：性的指向、性的なあり方」を指している（清水晶子『フェミニズムってなんですか？』（2022年、文春文庫）。はたして、メディアが多様な性を構成しているのかという点についても1日目のメディア分析を通してクリティカルに考えていくことの意義について、問題提起をした。

●セッション2 「CMの映像言語」

報告：田島知之

本セミナーで最初にグループワークをおこなうセッション2では、メディア分析の入門として、「メディア言語」に着目した分析に取り組んだ。まず中心となる基本概念7「メディアは独自の様式、芸術性、技法、きまり／約束事をもつ」についての説明があり、それぞれのメディアがもつ特性を理解することの重要性を確認したうえで、実際の分析にうつる。

ここでは分析の対象として、野球の大谷翔平選手が出演する美容液のテレビCMを使用した。普段私たちがネットやテレビを見ているときのようになんとなく映像をながめるのではなく、「映像言語分析シート」を使って、繰り返し映像を見ながらその内容を書き出していく。映像のショット数、編集・映像処理、カメラワーク、画面の色調、テロップ、CG、BGM、ナレーション、状況設定などの要素に注目して文字化し、そのうえで、それらの映像技法・音声技法が作りだしている意味について、グループで話し合いを行なった。

「男性アスリートが化粧品のCMに出演」ということで話題になったCMでもあり、見たこと、聞いたことがある人は多かったものの、ここではその映像から受ける「印象」がどのような映像技法／音声技法で構成されているのか、根拠をもって「分析」という、ふだんとは違う見方をするようになった。またグループでの話し合いや発表を通じて、自分にはなかった視点やお互いに気づけなかった部分、知らなかった情報が活発に共有される場となった。

●セッション3 「ニュースはどのように構成されているか～少子化問題を考える～」

報告 高橋恭子

このセッションでは、6月13日に放送された少子化問題のテレビニュースを見ながら、メディア・リテラシーの3つの基本概念である「すべてのメディアは構成されている」、「メディアは『現実』を構成する」、「オーディエンスがメディアを解釈し、意味をつくりだす」を主に理解した。セッションのねらいは、以下の通り。

- ①ニュース報道は現実そのものではなく構成されたものであることを、その構成の流れを分析することで理解する。
- ②ニュース報道は、そこに登場している人々の属性や発言、行動を通して、さまざまな価値観ともとの考え方を伝えていることを知る。
- ③ニュース報道において、誰の声が聞かれ、誰の声が聞かれなかに気づき、そのことについて独自の視点を提示する。

TBS「News 23」の『非正規の男性から不安の声も 児童手当の拡充「来年10月から」』をテキストとして使用した。ニュースの中で、岸田総理は「少子化対策においても、経済的支援に重点を置き、構造的な賃上げや労働市場改革とセットで抜本的に強化する」と会見で明らかにしているものの、非正規雇用で働く若いカップルにとっては、子どもを持つことへのハードルが高く、結婚、出産に至らない人たちへの施策が必要であることを伝えている。ワークショップ前のアイスブレイクでは、「私たちにとって少子化はどのような意味がある

のか」「誰がどのように少子化対策を担うべきなのか」について話し合い、参加者の少子化問題に対する意識を確認した。ワークショップでは、4つのグループに分かれ、以下の問いに沿ってディスカッションを行なった。

1) このニュースでは、どのような人物（性別/年齢/人種的文化的背景/社会的地位・職業など）や事象がどのような場所や状況のもとで、どのような順序で映し出されているでしょうか。カメラワーク、テロップ、グラフィックなどにも留意して、考えてみましょう。

2) 全体として、テキストはなぜこのように構成されているのでしょうか。毎日新聞「少子化対策 浮かぬ若者」（2023年6月15日）を参照しながら、ニュースで取り上げられている事柄を、政治的・経済的・社会的・文化的文脈を考えながら話し合ってみましょう。取り上げられなかった事柄についても話し合ってみましょう。

3) テキストはジェンダー平等の視点から見るとバランスが取れていたでしょうか。少子化問題を多様な視点から取り上げていたでしょうか。

6月13日は「こども未来戦略方針」が発表され、夕方に岸田首相が記者会見を開いたが、各テレビ局の夜のニュースでは、少子化問題を正面から取り上げず、選挙や政局がらみのニュースとして扱っていた。「News 23」は唯一、この問題を取り上げた放送局でしたが、トップニュースは「6月男 大谷翔平 3年連続の偉業」であり、同ニュースは4番目の位置づけだった。

グループディスカッション終了後のコメントシートやふりかえりでは、多様な見解に触れ、対話を通じて発見、気づきが見られたことが確認できた。ポジティブな感想が多く、社会問題を意識化し、対話を促進するツールとしてもメディア・リテラシーは可能性があるといえるだろう。

参加者のコメントは以下の通りである。

- 問題意識を対話で確認できたことは意義深い
- ワークショップを通して、『なるほど』『確かに』と確認できたことが多々あった
- 制作者側のジェンダー意識（男性優位社会）が映像・音声の表現を通し、透けて見えた
- メディアは少子化政策をどうとらえているか明確な視点で提示されていない現状がある。単なる政府の広報になってしまっている。ニュース番組や局が複数あることを意識する必要がある。メディアに流されず、クリティカルに分析する必要性を感じる
- ニュースで語られる文脈は世論の形成に影響を及ぼす可能性がある
- 少子化問題と言いつつ、実際、伝えられているのは政局（解散、財源）であった
- 少子化問題について、どのメディアも本気度が感じられない
- 少子化問題の重要性を軽視している自分自身に気づいた
- 現在の少子化対策は、単に高齢者を支えるための道具に過ぎない
- 対話を通じて、他者から思わぬ視点や考えを聞けることが面白く、意義深いように思う

これらのコメントは1. ワークショップに対する評価、2. ワークショップを体験し、自分自身にないもの（異なった意見や価値観）に気づいたこと、3. テーマである少子化問題が可視化されたこと（メディアが扱う内容がバランスを欠いていることや政府の政策そのものに問題があること）に大別できる。

●セッション4 「アニメが提示する価値観」

報告：中田理砂

このセッションでは、アニメ番組「HUG っとプリキュア」（2018）を題材にし、映像技法などにみられる固定的なジェンダー役割や暴力、価値観の提示がどのように子どもたちに影響を与えているかを検討するとともに、巨大化するアニメ（およびその関連商品）産業について理解し、メディアのもつ商業的視点という特性を理解することを目標に実施した。

「HUG っとプリキュア」第1話から2箇所を視聴し、記入シートにキャラクターの特徴や暴力などについて個人で記入し、各グループで発表、意見交換をしたのち、会場全体で引き続きその感想等を共有した。

参加者からは、ふだんアニメを見慣れていないので、ストーリーについていけなかった、言っている言葉が分からなかったという課題に直面する声も挙げられたが、その機会がないからこそ、興味を持って話し合えたとの意見が出た。特に、小さな子どもたちがみる番組ゆえ、ジェンダーステレオタイプや暴力についての懸念、さらに、関連CM（参考として提示）を見ることで、改めて商業視点を考えるきっかけとなった。

セッション5では全体で1日目の振り返りを行いました

●セッション6. フェイクニュースはなぜ生まれるのか？ 報告：森本洋介

セッション6のねらいとしては、フェイクニュースがなぜ生まれたり広がったりするのか（そもそも誰も興味を持たないニュースであれば、フェイクであろうとなかろうと広まることはない）について、自分たちでニュースをつくるという作業を通じて考えることであった。本セッションは以下のように合計4つの活動から構成された。

活動①アイスブレイク：朝の編集会議

活動②フェイクニュースの分析

活動③制作作業の説明とVVCwebの使い方の説明、制作活動～投稿まで完了させる

活動④制作したニュースにリプライする。リプライを振り返り、フェイクニュースが生まれる背景にあるものを考える。

活動①ではルネ・ホップス著：森本洋介、和田正人監訳『デジタル時代のメディア・リテ

ラシー教育：中高生の日常のメディアと授業の融合』東京学芸大学出版会、2015年9月15日 (Hobbs, R. (2011). *Digital and Media Literacy: Connecting Culture and Classroom*. CORWIN: USA.) 8章の活動を援用し、ニュース報道が人によって異なる価値を持つものであることを考えてもらった。

活動②では田んぼにいたザリガニが猛暑で死亡したらしいという実在の Twitter 記事について、ウソか事実か、悪意があるのかないのか、という基準で、グループでその程度も含めて協議した。「悪意」という言葉の解釈に差があったが、すべてのグループが「ウソ」かつ「悪意はない」という方向で解釈した。この活動で考えてもらいたかったのは、この投稿がどこに当てはまるのかではなく、第一投稿者の意図、そしてそれを拡散させていった人々の意図（ネタとしておもしろいか、気候変動の問題として重く受け止めるか、など）によってニュースの受け止められ方が変化していく様子について考えてもらうことであった。

活動③と活動④が本セッションの核である。活動③では4つのグループが1つずつクジを引き、例えば

○本セミナー会場近辺の珍百景

○近江八幡市のゆるキャラ（どれでもよい）のPR

○第24回FCT研修セミナー（実際にはやっていないことを本当にやったかのように報じる
虚偽のニュースをつくること）

といったテーマについて写真を撮影し、VVCwebというクローズドなSNSに投稿した。珍百景やゆるキャラについては実在するネタを投稿してもらったが、ウソの研修セミナーについてはやらせをしてウソのセッションで会場が熱気にあふれる様子を「構成」してニュースにすることになった。複数のニュースをつくったグループもあれば、1つのニュースをつくるのにエネルギーを使い果たしたグループもあった。いずれにしても事実に基づくニュースについては「ウソだと受け取られると困る」という意図をもって作成したグループがあり、またフェイクニュースをつくったグループはそれっぽく受け取られるようにつくっていた。ただし互いのグループは投稿テーマを知らない状況であり、続くコメントのセッションで考えながら他のグループの投稿にリツイートすることになった。

活動④では対面で参加できなかった学生などもコメント作成に参加し、合計30名程度が多数のコメントをつけた。このコメントと投稿に基づいてグループ協議を行った。グループ協議では、いずれか1つの投稿についてグループで取り上げて、「その写真はどの程度事実だと思われますか?」、「そのニュースがフェイクニュースか否かを見分けることは可能でしょうか?」、「フェイクニュースの何が問題なのかを考えましょう。フェイクニュースかどうか見破ることにどれだけの意味があるのでしょうか?」、「フェイクニュースと認識されて流れているニュースに対して、自分がそのニュースをフェイクではないとわかっている、そのことをSNSに訴えたとき、他の参加者はあなたの主張をどうすれば信じてくれるのでしょうか」といった問いについて協議した。

国内では、特に学校教育の文脈で「フェイクニュースの見分け方」のようなマニュアル的手法が注目を浴びている。しかし本セッションの活動②で考えたように、そのニュースがフェイクニュースかどうかを見破ることは、ともすれば第一投稿者ですら認識していない可能性がある。また、活動①で考えたように人によってニュースに対する価値づけはさまざまである。SNSはオールドメディア（インターネット登場以前のテレビや新聞など）と異なり、リアルタイムでニュースの解釈がなされ、またそこに参加するユーザーは識者からごく普通の人まで非常に多様である。ダイナミックに変化するニュースとその解釈に対して、「フェイクニュースか否か」を見分けることだけが本当に重要なのだろうか。確かに、ウソだと思えば拡散させなければよいだけであるが、ウソだとわかっているのに面白いネタとして拡散される場合も多々ある。逆に本当の事実を「ウソ」だと断じて投稿者を断罪するような動きに対して、それを否定して事実であることを信じさせることがどのようにして可能になるのかを、メディア・リテラシーでは考える必要がある。参加者からは、セッション6を終えてそういったことについて考えさせられたといった意見が出てきたため、一定の意義があったと考える。

セッション7. セミナー全体の振り返り 報告：森本洋介

セッション7ではセミナー全体を振り返る活動を行った。初日のジェンダーに関する映像言語、ニュース、アニメの分析、そして2日目のフェイクニュースについての分析と制作を結びつける話題として、LGBTQのうち、トランスジェンダーに対する保守派の人々の言論について主催者側から話題提供が行われた。

グループ協議ではこの話題提供も含めて、2日間のセミナーを通して自身が考えたことや話し合いたい内容について、ワールドカフェ形式で行った。時間の関係で2ラウンドしかできなかったが、それぞれのテーブルで話の内容が深まってゆき、各々にとって今回のセミナーがそこで完結するのではなく、次へのステップになっていったと思われる。

最後に参加者一人ひとりから本セミナーを終えての感想や意見を話していただき、セミナーを締めくくった。

アンケートを通して参加者からは、つぎの感想をいただいている。

- ・ジェンダーの視点でメディアを捉えること、「クリティカルに」考えること。今回のセミナーを期に、ただ、受動的に捉えないように「メディア・リテラシー」を身につけていきたい。特にニュースについては、これからも継続してこのような学習をする場を重ねていきたい
- ・ジェンダーについてテーマにすると、「男性の加害、女性の被害」に焦点があたるが、メディアをテーマにすると視野が社会に向くと感じた。
- ・「プリキュア」の映像言語の分析は面白かった。親子でメディア・リテラシーを学ぶ場を

提供する上でとても良い素材になると思う。

- ・参加者が異なる問題意識を持ち非常に新鮮だった。“差異”は可能性だと思った。
- ・分析だけではなく、ネット社会に対応する上で発信力が大事だと思った。
- ・2日目のフェイクニュースづくりは面白く楽しく参加した。自分でフェイクニュースを作ることで、フェイクニュースの拡散力や怖さを体感することができた。
- ・メディア・リテラシーの理解を深める上で対話が必須だと実感した。

以上